

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 企救 中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、3年生を対象として、「教科(国語, 数学, 理科)に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 数学, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

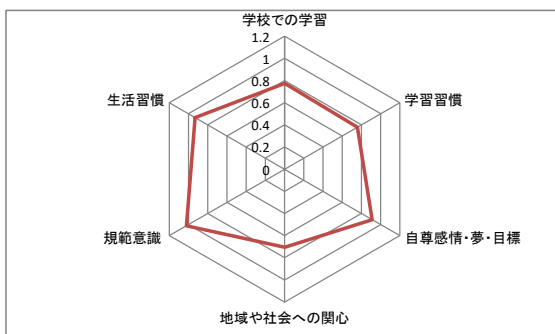
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 数学A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		数学A		数学B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	24.0	75	5.4	60	22.6	63	6.1	44	17.3	64
全国	24.3	76	5.5	61	23.8	66	6.6	47	17.9	66

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 聞く・話す能力や書く能力は全国平均正答率よりやや下がっていたが、読む能力に関しては全国平均を上回っていた。 全体的に無回答率が低く、国語の学習に対する興味・関心が高いと考えられる。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> 文脈の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことができるかを問う問題の中で、2問は3ポイント以上全国平均正答率を上回っていた。 文脈に即して漢字を正しく読む問題は全国平均との差はあまり見られなかった。 	
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いにして読む問題では、全国平均との差が大きかった。 構成を考えて文章を書く問題では、無回答率が高く、課題が見られた。 	
国語B	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 書く能力、読む能力を問う問題では、記述式の問題でも全国平均を上回り、力が伸びてきていることがわかる。 話す・聞く能力に関しては、質問の意図を考えたり、話の展開を注意して聞き、必要に応じて質問する力がついていないことが課題である。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> 話のあらすじをどのように説明するかという問題は、全国平均を5ポイント以上上回っていた。 文章を読み取り、内容の理解に役だてる問題は、全国平均を4ポイント以上上回っていた。 	
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> 全体と部分との関係に注意して相手の反応を踏まえながら話す問題については、特に全国平均との差が大きかった。 	
数学A	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均正答率を下回り、特に数と式の領域では無回答率も高く、課題が見られた。 資料の活用や図形に関する問題は、平均正答率も全国平均正答率よりやや下回り、無回答率も低かった。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> 比例式の問題や図形に関する問題では、無回答率も低く、平均正答率も全国平均との差が小さかった。 回転した図形をかく問題でも、平均正答率の全国平均との差は小さく、無回答率も低かった。 	
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> 指数を含む正の数と負の数の数の計算でや文字式を代入して式の値を求める問題では平均正答率が全国平均に比べてかなり低かった。 具体的な場面で関係を表す式を、目的に応じて変形することができる問題では、4割の生徒が無回答であった。 	
数学B	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 図形の証明に関する問題の平均正答率が低く、無回答率も高かったが、数と式の問題では、数学的な表現を用いて説明できる生徒の割合の全国平均との差があまりなかった。 理由を数学的に説明する問題の無回答率が高かったが、選択式の問題での無回答率は0であった。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> 図形の証明に関する問題の平均正答率が低く、無回答率も高かった。 数と式で考察の対象を明確にとらえることができるかをみる問題では、問全国平均とあまり差がなく、無回答率も低かった。 	
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> 図形の証明に関する問題の平均正答率が低く、無回答率も高かった。 	
理科	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 全国平均を下回り、特に記述式の問題に課題が見られた。 物理領域の問題を得意としているが、自然現象への興味・関心が低いので、生物領域を苦手とする傾向が強かった。 食塩水の濃度について考える問題やモデル実験の知識・技能を活用する問題では、正答率が全国平均を上回っていた。 	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> 食塩水の濃度について考える問題やモデル実験の知識・技能を活用する問題では、正答率が全国平均を上回っていた。 	
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> 記述式の問題では、選択式や記述式に比べ、無回答率も高く、正答率がかなり低かった。 	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> 家で宿題をしている生徒の割合(89.1%)で、全国平均には若干及ばなかったが、2年時より2割近く伸びていた。 授業では課題の解決に向けて自ら考え、自ら取り組んでいると答えた生徒の割合(52%)は昨年度より、やや下がっていた。 生徒の話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると答えた生徒の割合(64.4%)は、2年時より1割伸びていた。 家で自分で計画を立てて勉強をしていると答えた生徒の割合(34.2%)で全国平均より低かった。 自分にはよい所があると思うと答えた生徒の割合(67.1%)は、2年時より1割以上高くなっていた。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

・継続して漢字コンクールや英単語コンクールに学校全体にて取り組むことにより、基礎学力の向上を図り、やればできるという達成感を感じさせることによって、低位層の生徒の学習に対する意欲を高める。本年度から、計算コンクールも実施し、数学に対する意欲の向上も図る。

・定期考査前に「トライアルタイム」という習熟度学習に全職員で取り組むことで、数学につまずいた生徒のために、個別指導を実施し、わかる喜びを味わわせ、定期考査への取り組み意欲につなげる。

・「話す力・聞く力」を伸ばすために、授業中の話し合い活動の定着を図るために、校内研修を実施し、教科の枠を超えて、互いの授業を見合い、学力推進教員の協力を得ながら、授業改善を促していく。

・定期テストに『チャレンジタイム』を実施し、対策問題『でるもん』を作成し、取り組ませることによって、低位層の生徒の考査への取り組み意欲を高める。

② 家庭生活習慣等に関する取組

・家庭学習の定着のために、生徒の意見を取り入れた「企救ノート」を作成し、家庭学習に取り組ませる。何を勉強したらよいのかわからない生徒については、学年ごとにプリントを用意し、毎日提出することを目標にして、家庭学習の定着を図る。

・週末課題や長期休暇を活用し、基礎学習の定着を図る。

・小中連携推進会議で春休みの課題(4教科)を出題し、そのテストを実施することで新入生の学力を把握し、「中一ギャップ」に対応し、スムーズな中学校への移行を図る。

・学校便りやホームページを活用して保護者に学校の取り組みを知らせることによって、家庭学習への定着が図れるようにする。